五月の風

根来 澪子

形もなければ匂いもない。しかし私の身体は風のはっきりとした息吹を感じる。

爽やかな五月の風。まるで幸せを運んでくるようだ。同じ神奈川でも私の住んでいる丹沢山麓の街と、湘南の、ヨットをちりばめた海辺の風景では、こんなにも違うものかと驚いてしまう。過去や現在、そして未来の青春が溢れている、活気ある海の匂い、ささやき。高揚した気分をのせ、湘南バイパスを３０分ほど走って小さなＪＲの駅からほど近い、木立にかこまれた日本料理の料亭の前で車をおりた。

運転してくれているのは今日の会合の主役である新郎だ。杖をついている私を労わって、エスコートしてくれた。

後続の車から娘や孫たち、そして新郎のご両親が下りてきた。５５才の娘のＮは菫（すみれ）色のワンピースがよく似合う。新婦としての華やかさを全身に纏っている。今日から新しく娘の義父母になるお２人は、海がよく見渡せる駅近のマンションの８階にすんでいらっしゃる。娘は義母になるかたに頂いた薔薇の花束を大事に抱えている。私は初対面だが、とても品のいいご夫婦とお見うけした。奥様はグレイの髪を無造作に後ろに束ねていて薄いオレンジ色のスーツをお召しになっていた。ご主人様は８０代なかばだというのに１８０センチ近い長身で、メガネの奥のまなざしがいかにも柔和であった。

仲居さんの案内で、回りくねったうす暗い廊下を歩いて、予約していた部屋の席につく。黒い梁に囲まれた白壁に、作者は不明だが、百号あまりの抽象画が飾られ、大きな、窓から眺める緑濃い庭園の佇まいは、山奥の別荘にひっそりと住んでいるような雰囲気だ。

今日は、再婚ではあるがＮと、５６才の新郎、Ｈとの入籍祝の席である。お互いの両親の顔合わせの席である。着席し、Ｈが簡単に出席者を紹介をして、それぞれが、自己紹介をした。

Ｎ大学の芸術学部を卒業した２８才になる孫のＹは、デザイナーとして忙しい仕事についている。２５歳のＷは、Ｋ大学の環境情報学部を卒業してＩＴの仕事に

ついている。２人とも２０代の青春真っ盛りの社会人だ。若い２人の存在で活気にあふれた賑やかな会合になった。

初めて親戚となった新郎のご両親は、第一印象のように、とても気さくで、それでいて控えめで、風格のある持ち主であると、改めて実感した。娘より１才年長の新郎も、娘を末長く幸せにしますと、しっかりと挨拶をしてくれた。私たちは、「読書」という共通の趣味や、社会問題、政治問題などに話題を広げ、２人が新しい家庭を持つことを祝福しあった。乾杯には重い意味があり、鮮やかな器と、彩の美しい盛り付けの懐石料理を堪能した。

今回の２人の再婚に関して、誰１人、異議を持つものはなく、Ｎの２人の子供たち、すなわち孫たちも、新しく父となる人に対して親近感をもって接していることは、何よりの喜びであった。お互いに再会を期して両家の家族は和やかに帰路に就いた。萌黄色の雲のドレスを纏った半月がうっすらと海面に浮かぶ。そして、きらきらと微笑みかける。ひと時、私は水っぽい感傷に浸って車にゆられた。。

三女Ｎはいま、「一般財団法人」で管理職の仕事をしていて、結婚後も続けていくという。最初の結婚で何ら力になれなかった私も、娘の老後に伴侶ができたということは心強く、人生の最晩年になって、なりよりの慶事だと思っている。しかし、初婚のときから、Ｎは心休まる時もないような生活をしたのも事実だ。彼女の現在に至るまでをしみじみとおもう。

娘――三女Ｎの、山あり谷ありの人生を数ページで締めくくることは難しい。「我田引水」と言われるかもしれないが、あくまでも母親である私の目線で、ときどきの出来事を掬い上げることしかできない。Ｎは、私が乳児期に二女を失ってすぐに授かった子供であった。長女に対いては当時育児の本流であったエポック博士の育児書に従って、自立させるためにできるだけ放置するという殺伐とした育て方をして、その後悔を以前にもエッセイに書いたが、三女Ｎに関しては育児にも慣れ、のんびりとした育て方をしたと思う。従順で、全く手のかからない子供であった。幼児のころは近所の子供たちと戸外を遊び回わり、日暮れまで家に入る事はなかった。当時、年齢が同じくらいの子供たちは大勢いたし、親が指図をしなくても遊び仲間に困ることはなかった。しつけらしいこともしなかったし、野育ちに育ったというべきだろうが、まさしく「いい子」であった。

小学校時代は、当時の子どもが大抵そうであったように、ピアノ、モダンバレエ、御習字など、様々なお稽古に通った。私がとくに教育に熱心というわけではなく、色々挑戦すれば、どれかは成果が上がるかも知れないという程度の期待であった。どの稽古も嫌がることはなく、それ相応の成果をあげた。

高校は地元をはなれて、横浜の、語学を重視する特殊なカリキュラムを持つ高校へ進学した。当時としては珍しく、語学は英語のほか第二外国語として、フランス語かスペイン語のいずれかの授業を選択することができる高校で、Nはフランス語を選んだ。

まことに順調に娘は私立大学の仏文科に推薦入学をすることになる。そのG大学の仏文科は私の出身校で、私は自分の果たせなかったフランス文学への夢をNに託すという俗っぽいことをのぞんだが、後で思えば彼女には全く文学にたいする熱情はなかったようで、どうして経済学部を選択しなかったかと、後々後悔していたが、当時はほぼ、親の意見に従う素直な娘であった。

大学時代はたのしかったようである。友人と夏休みをフルに使ってヨーロッパ旅行をしたし、アメリカ、ロスに両親が居住する友人宅に、1か月滞在させていただいたりもした。語学は得意で、英検一級を取得したし、部活は「民族舞踊部」に入って、大学の文化祭の発表会には、夫と行った。母校を懐かしく散策した。夫にとっても母校であり、学生時代の思い出を語り合った。

ピアノの稽古は長続きしなかったが、モダンバレーはフラメンコ舞踊に代わり、大学卒業後も続けていた。

卒業後は新宿に本店のあるK書店の国際部に就職した。全く偶然に、直属の上司が、私の高校時代の同級生で、彼は取締役の地位を得ていた。その奇遇に喜びながら、私は娘の会社での様子を聞くために、新宿のカレー専門店で彼と、ときどき食事を楽しんだ。Nは、あっけないほど素直で、親の引いたレールを順調に進んでいくはずだった。私達の家族は平凡ながら、波風

のない日常を送っていた。

三女Nに縁談があったのは、就職してまる2年が過ぎたころ、夫の仕事の関係筋から持ち上がった。相手の家柄は、仙台に住居を構えていて、本人の祖父は金属物理学の分野で文化勲章を受賞しており、D研究所の理事長であり、東北大の名誉教授でもあった。父も、やはり同大学の教授であり、研究所の理事長を父から受け継いでいるという輝かしい学者一族であった。父の弟、すなわち叔父も同大学の教授であり、やがて文化功労賞を受賞するのである。

夫は当時、会社から派遣され、同大学で半導体の研究をして教授たちの知己を得ていた。娘が成人式で振袖姿で写した写真を教授に見せたところ、目にとまって、息子の結婚相手に是非にと望まれ、お見合いという事になったのである。

教授の息子である相手の男性Mは、東京の私立大学をでて、T銀行に勤務しているサラリーマンだった。東北の仙台のほかに東京にも、都心の地下鉄の駅近に、150坪の土地に40坪の家を構えていた。母親は東京生まれの東京育ちで、都心のT女学校を卒業しGHQに勤務していたという社交的な女性であった。父は地方の大学の教授であり、常に白衣をきて研究にはげむ学者であるのにたいして、母親は結婚しても東京住まいを変えることなく、ほとんど別居状態だったようである。研究のためロスに6年住んでいたこともあり、家族は英語は堪能だった。M本人も、父の住む東北の仙台に住むことなく、東京に生まれ、東京で育った。

母親の勧めもあって、東京の難関校、私立K高校に合格し、そのまま、ストレートにK大学に進めるはずであった。しかし、父親が許さなかった。自分の家系をつぐ息子の進路は、東北の自分が教鞭を取っている大学でなければならなかったのだ。母がいくら説得しても、息子がK大学を望んでも、文化勲章を受章し、2代わたって旧帝大で教鞭をとり、研究所の理事長を受け継いで来た自分の息子も同じような道を歩むべきであると、一歩も譲らなかったという。

息子にそれをのぞむならば、仙台で育て、それなりの環境で教育するべきであったのである。派手好みの母親の元で生活すれば、おなじような習慣がついて当然なのである。両親と子どもの間でかなり激しい対立があったと思われる。Mは結局K高校を諦めて都内の公立高校を卒業し、その間1年、カナダに留学したが、東北の大学に行くことはなく、A大学の経済学部を卒業し、大手の銀行に就職した。物理学の分野に進むことはなかった。息子の挫折と、父親の失望感で、親子

の間は冷え切っていたようある。娘と縁談があった時は彼は都内の銀行員であった。

夫の喜びようは大変なものであった。自分が尊敬する大学の教授の息子であり、会社の同僚からは、「玉の輿」に乗ったとうわさされた。平凡なサラリーマンの娘が、そのような家系に向いているか、しかし、娘は順応性に優れていたし、どんな環境にも順応していけるような性格であったので心配はしなかった。

家系はともかく、結婚相手のMはどうであったか、繰り返すが一日中研究室に閉じこもる学者の父と、東京の中心部に生まれ、GHQで仕事をしていたという母は、必ずしも相性が良かったとはいいがたかったとおもう。むしろ夫婦仲は破綻していたと思う。相反する両極にあって、Mの神経は切り裂かれていたのだ。

結納は、都心の名のある中華料理店であったが、初対面の時、母親は黒いサングラスをかけ、黄色いチャイナドレス姿で現れた。甲高い声で挨拶したが、淡いピンクのワンピースのNと、グレイのスーツを着ている私の中にあって、異彩を放っていた。父親は平凡な紺のスーツだったし、夫も同じようなごく普通の姿であった、

表面上、皆上機嫌で、妙にはしゃいでいた。Mも冗舌で座は大いに盛り上がった。むしろ我も我もの自己主張の喧噪はあたりをはばかるものがあった。満面破顔の夫につられてNも楽しそうだったし、相手のMも銀行員らしく礼儀正しく応対がよかった

母親の知人が専務であるという都心のIホテルで挙式の日取りが決まった。

しかし、そのにぎやかな饗宴の間に、私は、未来全体が灰色の幕がかかったような不安に襲われた。幾重もの暗い影が現れては消えた。全く異質の夫婦が並んでいて、息子はただただ虚無的に高笑いをしている風景に。

人生で最も幸せであるべきはずの半年ほどの婚約時代。当時、固定の黒電話は玄関の下駄箱の上に置かれていたが、婚約者のMからかかってくる電話口で、泣いているNに、まず夫が気付いた。それが2回、3回と続いて、Nに問いただした。Mは、娘の会社での行動を逐一報告させ、指図をしてくると言う。会社は何時に終わって、それから誰とどうしているのか、友人と寄り道をしたりすると、言葉汚く怒り出すという。絶えず監視されているようで気持ちが悪いと訴えた。彼が我が家に食事に来たりしたときも、言葉の端々に、尋常でない執拗さを感じて夫と顔を見合わせることがあった。その執拗さは大きな問題を起こすことになる。2人の間になにがあったのか、知らない。Nの言動で

意にそわないことがあったのか、MはNの会社に狂気のように何十回も電話をかけまくり、事務室は仕事に支障をきたし、社員を巻き込んでの騒動を起こした。会社の同僚や上司に顔向けができない迷惑を起こしたことで彼女は憔悴し、日ごろの明るさが全く消えてしまった。Mからの電話やデートの度に恐怖を感じるようになっていた。Mは精神を病んでいるとしか思えなかった。子煩悩の夫と、母である私は、困惑と怒りのどん底におちた。

「この縁談を断ろう」と、夫が決断したのは、喜びが大きかっただけに、そして相手の父親が、尊敬する大学教授であるだけに、そして栄光ある学者一族であるだけに、どんなに苦しかったか。その後、夫は胃潰瘍で倒れるのである。

結婚式の招待状は出来上がっている時期であった。しかし、Nの長い人生を考えると、やはり決断したほうがいいだろうと2人で話し合ってNも同意した。

まさしく丁度その時、仙台に住む父親から夫へ、久しぶりに仙台に遊びに来ないかという招待状が、新幹線の乗車券と一緒に送られてきた。鳴子に別荘があり、のんびり温泉に入って思い出話をしようという内容であった。夫と私、娘の心情を察してのことか、全く意に返さない裏腹な内容だったが、夫は誘いに応じて出かけて行ったのである。おそらくMが婚約解消の危機感をもって父親に要請したものだろう。

縁談を白紙に戻すためにでかけていったはずの夫は、上機嫌で帰宅した。大歓迎を受けて、すっかり丸め込まれてきたのである。大学はかって夫が派遣されて研究した懐かしい場所であった。その当時の想い出にふけり、回想し、夫はやはり娘を名声のあるM家に嫁がせたいという思いに駆られたようである。祖父は仙台の名誉市民にもなってた。私の本音も、バックに富と名声をもつM家にはやり未練があった。息子は物理学者にはならなかったけれども、祖父から引き継がれた血筋は争われないだろう。結婚すれば娘の子供、即ち私たちの孫にも血脈は引き継がれるだろう。人格も育ちも全く違う夫婦の間で育ったMに性格上の不安はあったが、時間の経過とともに解決するのでは、と楽観的に納得させることで破談を回避した。無責任な現実逃避だったとしか言いようがない。親のいいなりになるN自身の優柔不断さも原因の一つである。彼女に愛情はあったのか、大きなうねりに流されるように、時は瞬く間に過ぎていった。

そのころ、三女は中学時代から続けていたフラメン

コ舞踊が花開いていた。フラメンコは全身で魂の叫びを表現する踊りと言われている。スペインのアンダルシア地方に住み着いたロマ（ジプシー）たちの嘆きと情熱が迸り出る炎の踊りでもある。娘の、婚約にまつわる一種異様な経験が踊りの質を深いものにしていた。赤坂のＮホールで演目「ソレアレス」を踊ったのが賞賛された。師事していた先生からプロへの道を打診された。しかし、クラシックバレーのように、劇場の舞台での踊りというより、フラメンコは、タブラオと呼ばれる、舞台付きのレストランで、酔客を相手に踊るダンサーが多い。髪を乱し、汗を飛ばし、床を踏みつけ、全身をぶつけるように、狂気のように、踊るのがフラメンコである。酔客は「オーレ、オーレ」と掛け声をとばし、舞台と客席は興奮に包まれ、一体となる。

私はフラメンコにひかれて、スペインのタブラオをまわったが、床を踏み鳴らし、静から破局へと盛り上がっていくダンサーの気迫ある激しい踊りに魅せられた。

がしかし、当然夫は同意しなかった。学者の家系とダンサーでは進路があまりにも違いすぎる。Ｎにも、結婚生活以上に苦難を強いられるかもしれないダンサーの道にすすむほどの覚悟はなかった。

３月ーー、挙式をした。式は完ぺきであった。Ｍ家の権威を満足させるように、地位のある人たちが客席に並んだ。Ｎの大学時代の主任教授にも出席していただいたし、会社の取締役にも祝辞をお願いした。司会はＭの友人であるＮＫＨのアナウンサーであった。親せきは、のちの破局を予想したものはいなかったと思う。「光と影」とはまさにこの状態であった。

Ｎの花嫁姿を思うとき、私はいつもカンツオーネの「ラ・ノビア」を思い出す。

衝撃的な歌詞を日本語でカバーしたペギー葉山は歌う。［訳詞：あらかわひろし］

ーー白くかがやく　花嫁衣装に
心を隠した　美しいその姿
その目にあふれる　一筋の涙
私は知っている　アベマリア
祭壇の前に立ち　偽りの愛を誓い
十字架に口付けをして　神の許しを請うーー

江東区にマンションを購入して新居を構えた。私は三越家具を奮発した。一時、広島に転勤したが、やがて初孫、Ｙが誕生する。

夫にすい臓がんが発覚したのはそのころである。胃潰瘍で吐血し、一時的に回復したが、その後の検査で、

絶望的な結末になった。夫は第２子の、Wを見ることなく世を去った。子煩悩な夫がどのような心境で事態を見ていたのか、見舞いに来たMの両親にも、さりげなく接し、穏やかな最期であった。

私は薄氷を踏むような思いで、Nの生活を見守った。夜遅く、泣きながら苦境を訴えてくるNの電話で駆けつけ、其の場を取り持って、終電で帰ってくることも数回に及んだ。Nの夫、Mは銀行での昇進が思わしくなく、人事移動の季節のたびに家庭は荒れた。昇進を妨げるのは学歴のせいと父親は判断し、父親の勧めもあって、Mはやがて銀行を退職し、国立のH大学院を受験、合格して入学し、４０代で大学院生となる。Mと彼の両親は「妻子を持つ家庭の責任」よりも、社会に通用する「学歴」のほうをえらんだのであった。無職、無収入となったMは大学に通う以外は家庭に閉じこもり、Nの一挙一動を支配し、細部にこだわり、やがてパワハラとなっていく。

家庭に安住の場はなかった。父親に頭を下げて生活費を求めるのは、娘の意地が許さなかった。（父親はそれを望んでいたようだったが）。２人の子どもを学童保育に預け、Nは外に出て、職につく。大手不動産会社の派遣社員から、正社員に抜擢され、宅建の資格も取った。Mは大学院を卒業しても、父や本人が満足する職に就くことが出きなかった、卒業当時４０代半ばだった彼は、６０才の現在も無職である。

三女Nは、長女Yが中学２年、長男Wが小学校５年の時に離婚を決断する。２人の子供たちはすんなりと、同意したという。父親に対する愛着はなく、陰惨な家庭の雰囲気が子供心にも耐えがたかったようだ。離婚を成立させるまで、家庭裁判所の世話になったり、結婚の時と同じ位のエネルギーを必要としたが、Nは断固として親権をとり、子供たちのために、新たな人生を踏みだすのである。

苦境のなかにあった娘Nのために、私はなにもできなかった。夫が健在だったら事態を回避できただろうかと考える。夫だったら――。私は、「学歴」を第一に考える学者一族の相手の人格を云々するつもりはない。Mの父親は直系の孫であるWの大学生の姿をみることなく突然の病気で世を去った。

D研究所は２０１１年、公益財団法人と改名され、M家の栄光も過去のものとなった。Wは祖父と父親の葛藤とは無関係にのんびりとわが道を歩いている。Nはごく当たり前に家庭を築くことができなかったと泣いた。思いもかけずキャリアウーマンの道を歩くことになった彼女は、２人の子供が独立したいま、不動産会

社から、「一般財団法人」高齢者を援助する会社の国際室に転職し、再婚の相手となるＨに巡り合った

Ｈは小春日和のようなまなざしを持っている。

（２０２３年　６月）